# 物流現場を知る立場から安全対策提案へ
# 〝剥がれない床サイン〟が売り上げ伸ばす

日本ロジテム傘下でオフィス向け什器などを扱うロジテムエージェンシー（東京）が販売する、〝剥がれない床サイン〟「スマートマーク」が導入実績を伸ばしている。

ＰＣで作成したデザインを、紫外線で硬化するインクを用いて専用の印刷機でシートに印刷、シートから床に転写する。車両の往来にも耐える耐摩擦性が特徴で、水にも強く、不要になった際は専用の剥離剤で簡単に剥がせる。

２０２１年７月より取り扱いを開始し、22年度には一年間で約50社・１００拠点の施工を手掛けた。一度導入した企業からの、他拠点への横展開の依頼も増えている。自社で印刷設備を購入し、施工を内製化した企業もある。

マツダパーツ中日本物流センターに施工した床サイン

文字を使えるため新人スタッフも意味を理解できる（写真はともにロジテムエージェンシー提供）

## 全国拠点でデザインを統一

今年春に全国の物流拠点で同製品を採用したマツダパーツ（広島市）は、社内の安全基準達成のために施策を検討していた。企画の立案に当たり庫内の「見える化」が急務の課題として浮上。スタッフが視覚的に認識できる注意喚起方法を模索する中、同製品に着目した。転写面の素材を問わず施工できる点や、現場目線で独自のデザインを作れること、原状回復のしやすさなどを評価し、導入を決めた。

まずは防火シャッターや消化設備など、災害対策に重要な箇所を中心に社内統一の注意喚起サインを考案。東日本、中日本、西日本の各物流センターに施工した。

物を置いてはならない場所や防災設備がどの位置からも一目で確認できるようになり、使用物品の定置管理やルール遵守への意識向上に効果を実感しているという。

ロジテムエージェンシーは、日本ロジテムの物流機器導入も手掛ける。同社で床サイン事業の責任者を務める大貫俊幸氏は「グループの倉庫でも、注意喚起に使用しているラインテープが頻繁に剥がれて長年問題だった。荷主からも指摘を受けるため、社員が週１回の頻度で貼り替えていた場所もある。最初に製品の話を聞いた時、必ず需要があると直感した」と振り返る。

## 週に1度の貼り替えから解放

まずは日本ロジテムの倉庫での試験導入から開始し、徐々に販売を拡大。当初２人からスタートした部署は、今では協力会社のスタッフを含めて20人ほどになった。

従来の床サインはシールのように貼るタイプが主流で、人や車両の通行で端からめくれて剥離する。一方スマートマークは、大阪市のスタートアップ企業・アイエヌジーが特許を持つ「ＵＶ転写印刷」という技術を業務提携の上で用いている。インクのみを転写するためシールと比べて耐久性が高い。劣化はあるが、少しずつ欠けるような形で摩耗するので長期に使用できる。

フォークリフトが激しく往来するなど、床への負荷が高い場所では耐久性を高める施工もできる。人が通る場所には防滑加工も可能だ。

場所により耐用期間は異なるが、最初に導入した日本ロジテムの倉庫では、１年以上何もケアせず保てている場所もある。

大貫氏は「床サイン自体は新しいものではないが、これまで費用対効果のバランスが取れる商品がなかった」と語る。「コストは従来品に比べ安いとはいえないが、長期間問題なく使用できる場所も多い。逆にこの製品でも頻繁に施工が必要な高負荷の場所は、安価で貼り替えしやすい製品にするなど使い方の工夫を提案している」という。

既製デザインではなく、オリジナルのデザインが自在にできる点もメリットが大きい。

「例えば危険箇所にしても、従来の方法では危険の度合いや指示の内容まで表現するのは難しかった。荷主にも目に見える形で取り組みを見てもらえる。潜在的な需要はまだまだあるはずだ」と大貫氏は自信を見せる。（川本）